

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際科学史技術史・科学基礎論連合/科学史技術史部門
	英	International Union of History and Philosophy of Science and Technology / Division of History of Science and Technology (略称 IUHPST/DHST)
	団体 HP (URL)	<a href="http://dhstweb.org/">http://dhstweb.org/</a> (日本学術会議が加盟していること記載 <input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無 ) 以下のサイトに日本学術会議が日本の代表として記載されている。 < <a href="http://dhstweb.org/structure/ordinary-members">http://dhstweb.org/structure/ordinary-members</a> >
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>DHST は、DLMPST とともに構成する IUHPST の組織として、UNESCO の自然科学系の ICSU (International Council for Science) に加盟しており、2018 年の ICSU と ISSC の合併による ISC 設立後は ISC に加盟している。</p> <p>&lt;ISC との連携&gt;</p> <p>ISC は、2016 年に ICSU と ISSC との合併承認により、2018 年に正式に発足したが、合併の協議や発足後の活動に、DHST は積極的に参加している。具体的には、2018 年に合併の承認と規則改正についてメールで審議され、DHST も承認の投票を行った。続いて DHST と DLMPST との協議により、DLMPST の事務局長を ISC の役員に推薦することがなされた。</p> <p>&lt;CIPSH の活動への関与&gt;</p> <p>また DHST は、UNESCO の下で人文社会科学を統括する CIPSH (International Council for Philosophy and Humanistic Studies) にも加盟しており、CIPSH の活動の活性化に貢献している。なお、CIPSH には、IUHPST としてではなく、DHST と DLMPST それぞれ独立組織として加盟している。</p> <p>&lt;新設分科会の諸テーマ&gt;</p> <p>DHST には多くの専門分野で研究活動する分科会が所属するが、さらに新しい分科会として、「科学と文学」、「科学とジェンダー」、「科学技術と外交」というテーマの分科会が新たな国際学会が立ち上がり、2017 年の DHST の総会で承認された。これらの研究テーマが現在活発に研究されており、今後も活発な研究活動をしていくことが予想される。</p> <p>&lt;所在地登録と銀行口座開設&gt;</p> <p>当国際学会の銀行口座が正式にフランスの銀行に開設された。そのために当国際学会の所在地がパリにあるとして法的に認定される必要がある。そのため調査・準備・手続きに数年の歳月を要したが、2018 年 5 月にフランス政府 (パリ警察) に一つの Association として登録され、続いて 7 月にフランスの銀行に口座が開設された。DHST の所在地については、パリ天文台の所在地を利用させて頂くことになった。</p> <p>分担金の支払いについて、2017 年度までイギリスの銀行口座に振り込まれており、2018 年度は一時的な処置として現在 DHST の財務担当役員の在籍する国であるチェコの銀行口座に振り込んでもらうが、2019 年度以降は新しく開設したフランスの銀行口座に恒常的に振り込んで頂く予定である。</p> <p>&lt;DHST アーカイブの作成&gt;</p> <p>DHST の創設以来、事務局で保存している資料は膨大な量になる。それらを</p>	

## 様式第 2 (第12条関係)

	<p>整理してアーカイブ化することが計画され、現在作業が進められているが、その資料のインベントリーが完成し、総ページ数 325 ページに上るファイルが以下のサイトに公開されている。</p> <p>&lt;<a href="http://caphes.ens.fr/IMG/file/InventaireIUHPS.pdf">http://caphes.ens.fr/IMG/file/InventaireIUHPS.pdf</a>&gt;</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方法・研究助成方式等について</p>	<p>2017年にリオデジャネイロで開催された DHST の国際会議では千数百名の研究者が各国から参加したが、そのテーマは「グローバルとローカルの間の科学・技術・医学」というものだった。科学技術と社会の関係を、ローカルな社会とともに、世界規模のグローバルな社会における科学技術という視点から論じる研究の成果が多く発表された。従来、科学技術の発達に關聯する問題は、東西間（西洋・東洋）の問題として議論されることが多かったが、これに加えて南北間の視点を加えることによって、科学・技術の発展上の問題を多面的に抉り出し、科学・技術と社会との諸関係を新たな視点から見ることを提起した。</p> <p>リオの国際会議では、学術雑誌の編集に携わる研究者が集まるセッションもあったが、そこで今日のインターネット普及に伴う学術雑誌の新しいあり方や取り組みに関して紹介された。</p> <p>ISC のイニシアティブにより、研究者の研究環境における性差別の問題のアンケートの調査がなされているが、これに参加し、科学と倫理、若手研究者育成上重要な社会的問題の解決にも取り組んで来ている。また環境問題に関するプロジェクトでは、DHST の分科会である国際気象学会に対して参加を促した。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて</p>	<p>従来 DHST の役員としては、日本からはアセッサーを送り出してきたが、2017年の DHST の総会での選挙では、連携会員の橋本毅彦（東大教授）が事務局次長に選任された。そのため DHST の評議会でのより積極的な活動に従事するようになってきている。事務局次長として関与するようになった作業は以下の通りである。</p> <p>DHST と DLMPST との協力：両組織の間の Joint Commission の業務の一つに DHST 側からの委員として参加した。業務は科学史と科学哲学の両者に関わる優秀論文に賞を与える IUHPST Essay Prize in History and Philosophy of Science (2019)の選考であり、9本の論文の中から優秀な論文を選定するメール審議による選考作業に関わった。選考結果の最優秀論文と次点の論文の表彰は2019年に開催された DLMPST のプラハ大会でなされた。</p> <p>ISC と DHST との連絡委員としての活動：ISC のメールによる審議事項に関わるとともに、ISC から通達される情報の伝達などを行うようになっている。</p> <p>DHST の評議会の作業として、会議の議事録の作成などに関与している。また東アジア各国の代表と時折緊密に連絡をとり、国際学会の円滑な運営に貢献している。2018年度には評議会を東京で開催することを招致し、約10人の各国からの評議員を招いて会議を開催した。</p> <p>また事務局次長として、事務局長と財務担当委員の作業を助けるために、銀行口座の収入・支出の記録の詳細のチェックや、財務担当委員と各国代表との通信にあたって必要に応じて助言を行うことで、財務運営のより円滑な遂行に貢献したりしている。</p>

## 様式第2 (第12条関係)

<p>加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて</p>	<p>&lt;学会への利点&gt;</p> <p>国際組織への参加により、直接的に国際的な研究活動への参加や外国人研究者との交流などを行うことができ、日本国内の研究成果を対外的に広め、国際的な研究活動の一翼を担い、日本国内の研究活動、また関連学会の活動に対しては便宜を与えている。</p> <p>前記の通り、本団体の傘下には数多くの分科会があるが、主な分科会がカバーする専門分野は次の通りである。天文学史、地質学史、数学史、古代中世天文学史、物理学史、化学史、科学機器史、技術史、東アジア科学技術医学史、計算科学技術史など。このうち、地質学史、化学史、古代中世天文学史、東アジア科学技術医学史の分科会には日本人の科学史研究者が積極的に参加し、また他の物理学史、科学機器史、技術史、計算科学技術史などの分科会にも日本人研究者が定期的に参加しているところである。DHSTの活動は、メンバー各国代表からの分担金に基づき、これらの分科会の活動を円滑に進めるとともに活性化させることを主な目標にしており、これらの分科会における活発な研究活動により、日本の科学史学会や関連の諸学会に所属する日本人研究者が大きな恩恵を被っており、またひいては日本国民に対しても科学史・技術史・医学史の知識の普及、とりわけ今日活発に研究が進められている領域の研究成果の提供という点で大きく貢献しているところである。</p> <p>また本 DHST に加盟していることは、日本人研究者と世界各国の科学史・技術史・医学史の研究者の国際的な交流や協力を強化することに大変貢献している。直接的な私的な人的交流とともに、雑誌の編集における査読の依頼や適切な査読者の紹介、また来日時研究会参加や講演など、多くの面で日本の科学技術史の研究教育に貢献しているところである。</p> <p>なお、国際会議の動向は、4年毎の国際学術集会・総会の参加報告集を毎回、本 IUHPST 委員会として冊子媒体で作成発行しており、国際レベルでの学術的諸問題を国内に提起するとともに、若手研究者が国際的に活躍するひとつの手がかりとして役立ててもらっている。</p> <p>&lt;日本学術会議への利点&gt;</p> <p>科学の発展は歴史的な性格とともに、国際的な関係の中にある。コンピュータ、AI、遺伝子、等々そして軍事と科学の諸問題等においても、さらに倫理と科学、ジェンダー問題と科学等においても、この関係の中で展開されており、国際社会と日本社会の中において国民の福祉と科学技術の発展、そのあり方を追求する日本学術会議もこの関係の中で問題を捉えざるを得ない。科学史技術史の分野からの研究の成果や問題の提起が、日本学術会議と日本の多くの分野における科学・技術のあり方に利点をもたらすことを細かく挙げることは制限がないが、近年の例を挙げれば、日本学術会議の基本姿勢に関わる「科学研究と軍事」問題の検討で、科学史技術史研究者が日本学術会議のシンポジウム等で大きな役割を果たしたことがいえよう。若手研究者問題やジェンダー問題でも科学史技術分野からの発言がある。こうした貢献は、科学史技術史研究者が国際組織にコミットし、国際的に生起、議論されている諸問題を歴史的に分析研究することによって可能性を高めている。</p> <p>&lt;国民的利点&gt;</p> <p>科学史技術史研究者が国民に利する点としては、研究開発上歴史性への理解</p>
---	---

様式第 2 (第12条関係)

	<p>が利点をもたらしたり、科学・技術の展開と社会との諸関係を洞察するうえで国際社会の多様性の中で見る大きな便宜を与えていることに加え、教育問題に顕著である。若い世代が科学研究に魅力を感じたり、過去の科学者の物語（科学史）が科学への志を誘発されたりすることは今更言及することもないが、教育から科学者技術者（科学史技術史）は切り離せない。しかし、狭い社会の中から教育的に豊かな事例を取り出すより、多様な国際社会の中から好例を見いだすことの方がよいことはいままでもなく、ここにも国際的研究の進展が、国内にも関わりあることがうかがえ、国際組織に加盟し国際研究の動向に深く触れることのメリットがある。近年、高校教科書に、授業上の大項目にガリレイをいれるかどうか議論となっているが、科学史的な成果を無視する処置からは適切な解が得られないであろう。このように、科学史的技術史的研究の進展は、単に国民教養の向上にとどまらず、教育上の課題とも連なっている。</p>
<p>その他（若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など）</p>	<p>本国際組織は、全世界の若手研究者の博士論文の研究に2年に一回賞を与えている。（以前は4年に一度であったが、より頻繁に機会を与えるために2年に一度に改正された。）</p> <p>DHST から分科会の活動への資金援助は、300ドルを上限とする経常経費、600ドルを上限とするウェブサイト構築と運営経費、そして1500ドルを上限とする会議開催費の3種類のカテゴリーでなされており、最大2400ドルの支援がなされている。このうち会議開催費については、すべて若手研究者が会議に参加するための旅費の支援に充てられることが義務づけられており、各分科会が年度末に提出する報告においては、支援を受けた若手研究者の氏名ならびに支援を受けた各若手研究者が受け取った金額が記載されることになっている。このような若手研究者の分科会会議の参加旅費への支援の限定とその詳細の報告の義務づけは、本年度からなされていることであり、若手研究者の研究活動を支援し、分科会の活動における若手研究者の活動を非常に重視し、その活性化・活発化を意図したものである。</p> <p>2013年に開催された総会で「マンチェスター宣言」が採択され、科学技術医学史の研究の社会における必要性、また社会に対する貢献を9項目にわたって宣言している。同宣言は、以下のサイトに掲載されている。  <a href="https://docs.google.com/viewer?a=v&amp;pid=sites&amp;srcid=ZGhzdHdlYi5vcmd8d3d3fGd4OjVhNTEyZGYxOGNmNDRhZDE">https://docs.google.com/viewer?a=v&amp;pid=sites&amp;srcid=ZGhzdHdlYi5vcmd8d3d3fGd4OjVhNTEyZGYxOGNmNDRhZDE</a></p> <p>また上記したがISC傘下の諸学会と協力して、科学プロジェクトにおける性格差に関する国際アンケートを国内でも普及させるべく活動を行った。</p> <p>このジェンダーギャップ・プロジェクトにはDHSTからも積極的に参加して2019年11月にトリエステで開催された会合においてもDHSTから事務局長であるカテリーヌ・ジャミ氏が出席して講演を行い、報告書の作成にも貢献した。）この成果を受けて、DHSTにおいても次の4点を進めることが2019年12月DHSTの評議会で決定された。第一は、「Policy of respectful behaviour（敬意ある行動の指針）」を起草して実施することである。（そのような指針は、米国の科学史学会で作成され実施されており、それを参考にしつつ進められることになっている。）第二は、次回の2021年の役員選挙においても候補選定にあたってジェンダー・バランスが考慮されるようにする。第三は、次回の2021年</p>

## 様式第 2 (第12条関係)

	の国際学会において本テーマのセッションを企画すること。そして第四は、ジェンダーギャップ・プロジェクトを引き続き財政的にも活動的にも支援していくことである。
--	---

### 2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)	理事会に相当する評議会の会議を、2018年に日本に招致し、東京大学の本郷キャンパスで 12 月 8 日に開催した。現在 DHST の評議会には 14 人から構成されているが、東京で開催する評議会には、10 人が参加した。このうち 1 名は DLMPST からの代表であるが、今回は通常出席する DLMPST 事務局長が所用で出席できず、代理として DLMPST の日本在住の評議員 (岡田光弘慶応大学教授) が出席することになった。参加者の国籍は、欧米諸国の他にインド・ブラジル・ソ連などが含まれる。
日本人の役員立候補等の予定について	当国際学会の役員の改選は 4 年ごとの総会で行われるが、毎回日本人の役員への立候補がなされる予定である。
現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて	特になし

### 3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・理事会・各種委員会等の状況 (過去 5 年間及び今後予定されているもの)	総会開催状況	2013 年 (開催地: マンチェスター)、2017 年 (開催地: リオデジャネイロ)、2021 年 (開催予定地: プラハ)
	理事会・役員会等開催状況	<p>2013 年 (開催地: パリ)、2014 年 (開催地: マルセイユ)、2015 年 (開催地: 北京)、2016 年 (開催地: リオデジャネイロ)、2017 年 (開催地: リオデジャネイロ (7 月)、プリンストン (12 月))、2018 年 (開催地: 東京)、2019 年 (開催地: プラハ)</p> <p>2017 年にはリオデジャネイロで国際大会が開催されたため、国際大会の前後に 1 回ずつ評議会を開催し、さらに同年 12 月に米国プリンストンで定例の評議会を開催した。2018 年には評議員の一人である橋本毅彦 (東大教授) が東京に招致し、東京大学本郷キャンパス内の法文 2 号館の会議室で開催した。2019 年には 2021 年に国際科学史学会の開催を予定しているプラハで開催した。(なお 2020 年はロシアのサンクトペテルブルクで開催することを予定していたが、コロナ禍のために開催できないことが予想され、現地で開催しない場合にはオンライン会議を開催することが予定されている。)</p> <p>また、評議会では、これらのほぼ毎年の会議での審議とともに、随時メール審議を頻繁に行っている。今年度に行ったメール審議の中には、上記のように ISC の創設の承認、DHST と DLMPST の連携強化を目的とする合同委員会の規則改正、若手研究者への奨励賞の授与時期の改定などである。</p>

様式第 2 (第12条関係)

各種委員会開催状況	<p>DHST の下では 24 の分科会が活動している。各分科会が各専門分野の国際学会として活動し、多数の国際会議を開催している。これらの国際会議については、次の項目の説明を参照。</p> <p>DHST の下での事務的な委員会は評議会委員の選挙を準備する選挙管理委員会や若手研究者を対象とする博士論文賞選考委員会などがあり、前者は 4 年ごとの国際大会の前年に、後者は隔年に開催される。</p>			
研究会・会議等開催状況	<p>DHST の下での 24 の分科会の活動をここにすべて記載することは不可能である。それらの多くは、各専門分野の国際学会として活動し、上記の DHST の国際大会に合わせて会議を開催するとともに、その間の概ね年に一回ないしは数回の会議を開催している。各分科会の活動はそれぞれのウェブサイトをもつようになっており、それらのウェブサイトのアドレスは上記の DHST のウェブサイト&lt;<a href="http://dhstweb.org/">http://dhstweb.org/</a>&gt;の中に記載される各分科会のリストに記載されている。</p> <p>分科会は、自然科学の国際学会と連携する「インターユニオン分科会」、天文学史などの各専門分野の科学史をカバーする「歴史分科会」、DHST と DLMPST との連携で設置される「インターディビジョン分科会」、より独立性の強い「サイエンティフィック・セクション」にカテゴリー分けされている。それぞれのカテゴリーでの分科会は、</p> <p><a href="http://dhstweb.org/structure/inter-union-commissions">http://dhstweb.org/structure/inter-union-commissions</a>  <a href="http://dhstweb.org/structure/historical-commissions">http://dhstweb.org/structure/historical-commissions</a>  <a href="http://dhstweb.org/structure/inter-division-commissions">http://dhstweb.org/structure/inter-division-commissions</a>  <a href="http://dhstweb.org/structure/scientific-sections">http://dhstweb.org/structure/scientific-sections</a></p> <p>の各ページにリストされており、その各分科会の名称・会長名・会長所属・会長アドレスに続き、各分科会のウェブページがハイパーテキストで記載されている。</p> <p>例えば歴史分科会の一つである科学機器史分科会のウェブページ&lt;<a href="http://scientific-instrument-commission.org/">http://scientific-instrument-commission.org/</a>&gt;には、毎年開催されている同分科会の過去の大会をリストするページ&lt;<a href="http://scientific-instrument-commission.org/conferences/past-conferences">http://scientific-instrument-commission.org/conferences/past-conferences</a>&gt;があり、そこに 1981 年から 2018 年までに開催された 37 回の年会（シンポジウム）の開催日程と開催場所が明記されている。同分科会のウェブサイトには他に同分科会が編集に関わった論文集等、科学史の研究教育に携わる人々にとって有用な出版物・ビデオ・データベースなどのリストやサイトの紹介が記されており、最新の情報を含むよう定期的に更新されている。</p>			
上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定	<p>2013 年、国際科学史技術史医学史大会（英国、マンチェスター）、約 60 人以上（総会議決権者：木本忠昭（代表派遣）、橋本毅彦、矢島道子、溝口元、梶雅範、黒田光太郎）</p> <p>2017 年、国際科学史技術史大会（ブラジル、リオデジャネイロ）、約 30 人（総会議決権者：木本忠昭（代表派遣）、橋本毅彦、矢島道子、溝口元、市川浩、伊藤憲二）</p>			
国際学術団体における日本人の役員等への就任状況（過	役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
	評議員	2013～2017	橋本毅彦	(22, 23 期) 会員・ <b>連携</b>
	事務局次長	2017～2021	橋本毅彦	(24, 期) 会員・ <b>連携</b>
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携

様式第2 (第12条関係)

去5年)		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
		～		( 期) 会員・連携
出版物	DHST では定期・不定期の刊行物を出版していないが、傘下の24の分科会では活発に定期的な刊行物が発行されている。(例 ICOHTEC の <i>ICON</i> )			
<p>活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載  (現在の状況を含む 2017 年以降の活動については、主として <a href="http://dhstweb.org/">http://dhstweb.org/</a> を参照。2017 年以前の活動については、主として <a href="https://sites.google.com/a/dhstweb.org/www/">https://sites.google.com/a/dhstweb.org/www/</a> を参照。)</p> <p>DHST の評議会は毎年 12 月に各国で開催されているが、そこで報告ならびに審議された事項とその内容を記す評議会議事録は、上記 <a href="http://dhstweb.org/">http://dhstweb.org/</a> の中にアップロードされている。そのうち最近 5 年間に開催された評議会の議事録の URL は以下の通りである。</p> <p>2019 年 12 月にチェコ共和国プラハで開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2019/12/DHST-Council-Minutes-191207.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2019/12/DHST-Council-Minutes-191207.pdf</a></p> <p>2018 年 12 月に東京で開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/12/DHST-Council-minutes-181208.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/12/DHST-Council-minutes-181208.pdf</a></p> <p>2017 年 12 月に米国プリンストンで開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/01/171209-Council-Minutes.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/01/171209-Council-Minutes.pdf</a></p> <p>2017 年 7 月にブラジル・リオデジャネイロで開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/170723-DHST-Council-Minutes.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/170723-DHST-Council-Minutes.pdf</a></p> <p>2016 年 12 月に同・リオデジャネイロで開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/161203-Minutes-DHST-Council.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/161203-Minutes-DHST-Council.pdf</a></p> <p>2015 年 12 月に中国北京で開催された評議会議事録：  <a href="http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/151212-DHST-Council-Minutes.pdf">http://dhstweb.org/wp-content/uploads/2018/10/151212-DHST-Council-Minutes.pdf</a></p>				

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	史学委員会 IUHPST 分科会
	委員長名	木本忠昭
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 2017 年 12 月 27 日 国際会議報告・参加報告書作成、新役員選出、今期活動計画 2018 年 11 月 18 日 IUHPST/DHST 評議会、代表派遣、その他活動 2019 年 12 月 28 日 DHST 評議会の報告、DLMPST 国際会議 (CLMPST) 報告、代表派遣候補者決定、今後の活動、その他活動
国際学術団体 (内規第3条)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 ( <a href="http://dhstweb.org/documents/statutes-rules-procedure">http://dhstweb.org/documents/statutes-rules-procedure</a> )	

様式第 2 (第12条関係)

<p>各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている（主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か）</p> <p>1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない</p> <p>※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (<a href="http://dhstweb.org/structure/ordinary-members">http://dhstweb.org/structure/ordinary-members</a>)</p>	
<p>下記の事項（ア～エ）のいずれか一つに該当するか（該当するものに○印）</p> <p>ア <input checked="" type="radio"/> 個々の学術の専門分野における統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一かつ世界的な組織を有するもの</p> <p>ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの</p> <p>エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの</p>	
<p>10 カ国を超える各国代表会員が加入している</p> <p>1. <input checked="" type="radio"/> 該当する      2. <input type="radio"/> 該当しない</p>	
<p>加入国数及び主要な各国代表会員を 10 記載</p>	<p>(47ヶ国)</p> <p>・各国代表会員名／国名</p> <p><b>Jay Malone</b>／米国、 <b>Patricia Fara</b> / 連合王国、 <b>Karine Chemla</b>／フランス、 <b>Reinhold Bauer</b>／ドイツ、 <b>SUN Xiaochun</b>／中国、 <b>Laura Hoolsten</b>／フィンランド、 <b>R. Gadagkar</b>／インド、 <b>Kostas Skordoulis</b>／ギリシア、 <b>Christina Helena Motta Barboza</b> / ブラジル、 <b>Antonio Lamarra</b> / イタリア、 <b>Lesley Cormack</b>/カナダ</p>